

調査研究プロジェクト実績報告書【A 基幹研究】

1. 研究種別：A 基幹研究
2. 研究期間： 令和3年4月～ 令和6年3月
3. 課題番号： 2021A07
4. 研究テーマ名： 研究 I -1-A「新しいアイヌの歴史の構築」
5. 調査研究課題名： チャシの形成に関する考古学的研究
6. 研究代表者（氏名、職名）： 藪中剛司（研究学芸部長）
7. 研究メンバー（氏名、所属機関、職名）： 鈴木建治（室長補佐）、大江克己（研究員）、森岡健治（室長）
8. 研究協力者（氏名、所属機関、職名）：熊崎農夫博（前厚岸町教育委員会・学芸員） 小田島賢（厚岸町教育委員会・学芸員）
9. 交付決定額
令和3年度： 710,000 円
令和4年度： 1,461,000 円
令和5年度： 1,520,000 円

研究成果の概要（200字）

本研究課題では、千島諸島へとつながる交易拠点でもあった厚岸湖周辺に位置する、筑紫恋第1チャシ跡の発掘調査を実施した。その結果、チャシを建造した時の本来の機能だけでなく、その姿が失われた後（チャシ埋没後）も、新たな機能を持った場が形成されたと考えられ、地域集団の歴史の中でその役割を変化させてきたと想定することができた。そして、厚岸湖と苫小牧の出土舟における3D測定と年代測定を比較検討し、その地域的な差異性を考察していく基礎データを得ることができた。

研究成果の学術的意義・社会的意義（200字）

現在、主に北海道という地域の枠組みの中で「アイヌ文化」をどのように位置づけるのかが問われている。アイヌ民族を主体とした通史としてのアイヌ史の枠組みの中でアイヌ文化を整理し、そして日本史における中近世相当期に位置する「アイヌ文化期」という時代区分の再構築を考えることから始める必要がある。このような北海道考古学が抱えている重要課題への解決に向けても、チャシ研究の推進は極めて緊急を要していると想定される。

研究分野・専門分野： 考古学 文献史学 文化財科学

キーワード： チャシ 舟 厚岸湖 北海道東部

*調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

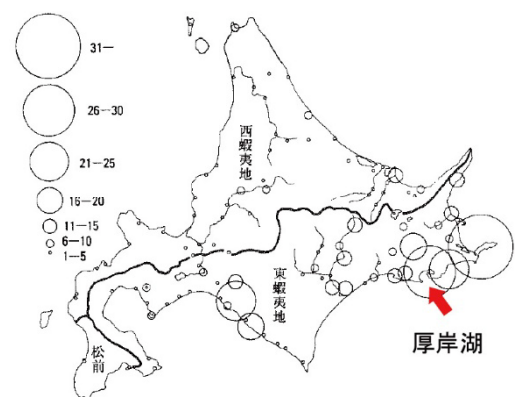
アイヌ民族の歴史構築は、学際的・分野横断的な観点から実施されるべきであることはもはや常識となつて久しい。その中でも、考古学で得られた最新の情報は、文献資料中心で構築されてきたアイヌ民族の歴史観を大きく変えることに寄与してきた。1980年代からの沙流川流域二風谷の遺跡群や千歳の美々8遺跡、そして2000年代における厚真の遺跡群などの発掘調査はその代表といえよう（北埋文 1986 など）。最新の研究成果を受け、新たな歴史像を提案の動きは活発化してきている（瀬川 2007、関根 2014 など）。このようなアイヌ民族の新しい歴史構築をめぐる研究動向をみてみると、考古学が果たした役割は、緊急発掘で得た最新情報の供給源として機能した部分が大きく、学術的観点から導かれた研究が少ないことがわかる。北海道の考古学をけん引してきた藤本強は、いわゆる「アイヌ考古学」の特質を生かした問題点の整理と分析の重要性を1980年代前半に指摘した（藤本 1984）。しかし、藤本の指摘から30年以上経過するが、アイヌ民族の歴史のいわゆる「中近世相当期」における課題整理と実践的な分析方法の確立までには至っていないのが現状ではないだろうか。

現在、主に北海道という地域の枠組みの中で「アイヌ文化」をどのように位置づけるのかが問われており、北海道考古学でもそれは重要課題となつてきている。しかし、ここでは、北海道という地域を主体とした時代区分から一度離れて、まずはアイヌ民族を主体とした通史としてのアイヌ史の枠組みの中でアイヌ文化を整理し、そして「アイヌ文化期」という時代区分の再構築を考えることから始めることが必要であろう。北海道考古学が歴史を復元する一手段として機能するのであれば、復元される歴史像はひとつだけではないはずである。日本列島における中央集権の歴史としての一国史的視点から北方域である北海道の歴史を主軸とした北方史・地域史的視点を相対化したように、先住民族としてのアイヌの歴史という民族史的視点も、日本の歴史や北海道の歴史から相対化することができると思われる。

このような考古学領域におけるアイヌ研究は、どのように日本列島北部周辺へ起きた過去の文化的コンテキストを民族の歴史の中で再構築できるか、が大きな問いとして現れてきている。

2. 研究の目的

本課題では、上記のようなアイヌ民族の歴史に関する考古学が担うべき役割の重要性を再認識しかつ当館が演じる役割も念頭に置き、アイヌの歴史と文化を代表とする構築物であるチャシの形成過程に関する研究調査を扱う。従来の形態分類や文献・伝承・地名等を活用したチャシ研究（宇田川 1980,1981 など）を超え、考古学の基軸である学術発掘の成果から発信したチャシ研究へのシフトを目指す。研究対象は、チャシ構築の中心地である道東に位置しかつ千島列島へとつながる交易拠点でもあった厚岸湖周辺とする。チャシの形成過程を解



北海道におけるチャシの分布

(宇田川 2001: 図 179)

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

明するための一方向性として特定地域内のイベントに注目することが重要と考えている。よって、発掘調査はチャシ単体ではなくまとまりで把握し実施していく。それにより、道東でチャシ構築がいつはじまったのかまたそこにチャシが集中するのはなぜか、交易民としてのアイヌ民族とチャシとの関連性とはなにか、といったチャシをめぐる諸問題に迫ることができると想定している。

また、千島列島へと向かうための交易拠点として機能した厚岸湖というラウンドマークで、アイヌ民族の広域的な移動手段を可能にした舟の存在は大きい。本課題では、この厚岸にとって欠くことのできない舟自体も検討し、アイヌの舟文化からみた厚岸という地域の特殊性についても言及する。特に舟の技術的・形態的特徴に注目し、厚岸湖出土資料の詳細なデータ収集を行い、また他地域出土の舟資料と比較を通じて、地域的特徴を導く。

3. 研究の方法

本調査研究は、考古学的手法を駆使し、下記の研究方法に従った。

①厚岸湖周辺のチャシ群の現地調査（踏査）と発掘調査エリアの選定作業。

厚岸湖周辺のチャシは現在 28 カ所確認されており、1) 別寒辺牛川河口西側、2) 厚岸湖北岸（別寒辺牛川河口東側）、3) 厚岸湖東岸、4) 厚岸湖西岸、5) 厚岸湾沿岸（筑紫・床）、6) 大黒島のエリアに分けることができる。本研究課題では、すべてのチャシ群の踏査を実施し、特に「4) 厚岸湖東岸」のチャシ群は詳細不明であるため、その様相を明らかにすることに焦点を当てた。しかし、想定よりもアプローチが難しかったため、今回は 6 エリアのうち「4) 厚岸湖西岸」と「5) 厚岸湾沿岸（筑紫・床）」の 2 エリアを踏査した。その結果、チャシの構造的な特徴や立地性等を考慮し、厚岸湾沿岸の筑紫恋第 1 チャシ跡を調査区として選定した。



筑紫恋第 1 チャシ跡の全景

(株)シン技術コンサルタント提供

②チャシの構築年代の解明を目的とした部分的な発掘調査の実施。

本調査研究課題における最大の特徴は、部分的な発掘調査（試掘）によりチャシの構築年代の解明にある。調査のポイントは、鍵層となる降下火山灰の検出や遺構面から採取した炭化物による年代測定（AMS 測定法）により構築年代を決定する。文献資料からは、17 世紀前半頃にオランダの探検家 M.G.フリースが厚岸湖でチャシを確認していることから、この年代をひとつの基準とし、その前後でどのような構造的な特徴を有するチャシが各エリアでまとまりをもって形成されたのかを考察する。また、従来の測量では検出できなかった地形の変化を読み取るよう、高精度の機材を使用したチャシの測量調査も実施した。

③3D 計測器を活用した舟の技術的・形態的特徴の分析。

令和 2 年度当館調査研究 PJ において、厚岸湖出土舟資料の年代測定（AMS 測定法）を行い、15 世紀中頃～17 世紀中頃に収まる資料が多いことが判明した(R2 年度報告書)。この成果を受け、厚岸

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

湖出土および苫小牧市所蔵の出土舟に対し、舟の技術的・形態的特徴を把握することを目的とした3D計測を実施する(当館所有器機を使用)。また、必要に応じて追加の年代測定も行うことで、計測データからみえてくる舟がもつ特徴の連続性・不連続性を検討する。

4. 研究成果

本研究課題の成果は、「筑紫恋第1チャシ跡の発掘調査」と「出土舟の3D計測とその年代測定」に分けることができる。

【筑紫恋第1チャシ跡の発掘調査】

発掘区は、丘頂面にある主体部(T01調査区)とチャシの壕部(T02調査区)の2カ所に設定し、下記のような調査結果を得た。チャシ跡の形成に関する時間幅については、残念ながら、当初想定していた火山灰の検出はできなかった。また、ANSによる14C年代測定法を試みたがデータが安定しなく、おおよそ17世紀後半から18世紀代の範囲に収まるのではないかと想定するにとどまった。

(1) 丘頂面の主体部の調査(T01調査区)

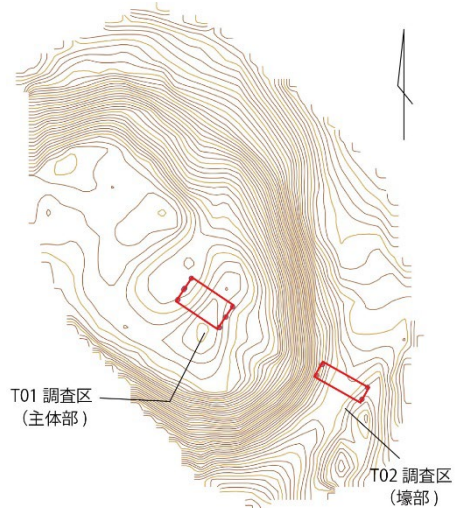
T01調査区は、竪穴状遺構の壁の立ち上がりに沿って、北西-南東方向に長軸を設定し、4m×2mの範囲を発掘した。残念ながら、丘頂面に海側の崩落を防ぐ土留のアンカー・ボルトが複数打込まれているため、遺構底部から壁の立ち上がりをおこの調査区では確認することができなかったが、調査の結果、上層と下層で2枚の文化層が検出された。

①マウンドとカキ集中の形成：上部文化層

竪穴状遺構の掘り上げ土を利用してつくられたマウンド(盛土)の上面に、直径1m弱のカキと動物骨による集中部が確認された(写真1)。その中から、骨角器の未製品(ブランク)も出土している。なお、この遺物集中部の真下から、長さ10cm程度の大型和釘が出土している。

②灰の一括投棄の形成：下部文化層

マウンド除去後、旧地表面が現れ、その上面に動物骨・魚骨・カキなどを含む灰が厚さ1~2cm程度堆積する空間が広がった(写真2)。その他、小型の釘や銅製品片、石英製の火打ち石などもある。これは、他の場所での炉の残滓をまとめて一括投棄されたことで形成されたと考えられる。更にこの旧地表面から打ち込まれた長さ15cm程度の炭化した杭跡も発見されている。下部文化層は壕部と同時代と想定される。



高精度の測量によるチャシの構造と発掘区の位置



写真1 マウンド上のカキ集中
(T01調査区：上部文化層)



写真2 灰の一括投棄空間
(T01調査区：下部文化層)

*調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

(2) チャシの壕部の調査 (T02 調査区)

T02 調査区は、T01 調査区の南東方向に延長上に設定し、チャシの壕を 5m×1m 範囲発掘した。壕の断面をみると、一般的にみられるような立ち上がりでなく、急な角度で立ち上がりシャープなのが特徴的である (写真 3)。溝の底部は、表土下約 1m の深さになる。表土下約 80cm の地点において、調査区一面に炭化物が広がる層が検出された (写真 4)。その炭化材の樹種同定の結果、在地では手に入らない、「スギ」(道南以南に生息) であることが判明した。この結果を受けて、この炭化物集中は、チャシに付随する構築物の建材であった可能性が極めて高いと考えられる。



写真 3 チャシの壕断面 (南西壁面)
(T02 調査区)

本発掘調査の結果、下記の大きな 2 つのイベントによりチャシ跡が形成されると理解できる。

第 I 期： チャシ建造から焼失までの時期
(灰の一括投棄空間も含む)

第 II 期： 堅穴状遺構をつくり、カキを大量に消費する時期
(第 I 期の層からカキの出土は少ない)



写真 4 チャシの壕に広がる焼失した建材
(T02 調査区)

以上、チャシを建造した時の本来の機能だけでなく、その姿が失われた後 (チャシ埋没後) も、新たな機能を持った場が形成されたと考えられ、地域集団の歴史の中でその役割を変化させてきたと想定される。このように、チャシに残された地域文化の記憶の層を丹念に明らかにしていくことで、北海道東部における地域文化の形成史に迫ることができるのではないかと考えている。

【出土舟の 3D 計測とその年代測定】

令和 2 年度当館調査研究 PJ で AMS14C 年代測定を実施した厚岸湖出土舟関連資料のうち、厚岸町海事記念館収蔵の舟 (No.2) 1 艘、太田屯田開拓記念館収蔵の舟 2 艘 (No.3,4)、舟先端部 1 点 (No.8) に対し 3D 計測を実施した。舟本体以外にも側板 4 点、櫂 1 点といった舟付属品に対しても計測を行った。なお、令和 2 年度実施した年代測定では、試料 7 点中 5 点が 15 世紀中頃から 17 世紀中頃 (1400 年代中頃～1600 年代中頃) の間に収まることが判明した。

厚岸湖出土舟の比較資料として、本研究課題では苫小牧市所蔵の沼ノ端出土舟 (道指定文化財) 計 5 艘に対して 3D 計測を実施した。3D 計測と合わせて AMS による年代測定分析のためのサンプル収集も行った。年代の測定結果については、4 艘が 15 世紀代であったのに対し、1 艘が 13 世紀頃と 200 年程度時間幅があるのに注目される。

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

今後、厚岸湖と苫小牧の出土舟のデータを比較検討し、その地域的な差異性を考察していく。

5. 研究成果の発信

本研究成果の発信は、まずは筑紫恋第1チャシ跡の資料・データ整理を終了させたのち、直ちに報告書を作成する。報告書の成果をもって、時事、論文執筆へ展開する予定である。また、出土舟に関する成果発信については、論文にてまとめる予定である。

なお、本研究課題に関するシンポジウムを下記のように実施した。

国立アイヌ民族博物館・苫小牧市美術博物館共同シンポジウム「アイヌの舟と交易」

アイヌ文化をより豊かにしてきたのは周辺民族との活発な交易であり、それを支えたのが海を越えて移動する舟の存在であった。本シンポジウムでは、北海道で出土した19世紀以前の舟を中心に、最新の研究成果や科学分析と共に、アイヌの社会や文化における舟の重要性について議論した。

日 時： 2024年5月18日（土） 13:00～17:00

場 所： 苫小牧市民会館小ホール

6. 主な論文発表・成果物等

〔雑誌論文〕

〔学会発表〕

〔図書〕

〔寄稿・解説〕

〔その他〕